

[参考事項]

成果情報名：水稲無落水移植栽培における葉いもちに対する育苗箱施用剤の防除効果

研究機関名 農業試験場生産環境部病害虫チーム
担当者 高橋真央・渡辺恭平・他5名

[要約]

無落水移植の条件でも葉いもちに対する育苗箱施用剤の防除効果は高く、落水移植と同程度であった。

[キーワード]

水稲・無落水移植栽培・葉いもち・育苗箱施用剤・防除効果

[普及対象範囲]

水稲無落水移植栽培導入地域

[ねらい]

近年、自動操舵による直進アシスト田植機を用いた水稲無落水移植栽培（以下、無落水移植）が行われている。本栽培では、湛水状態の移植作業となるため、移植時に処理した育苗箱施用剤が、育苗箱から水中に流出する可能性があり、防除効果に及ぼす影響を検証する必要がある。

本研究では、無落水移植における葉いもちに対する育苗箱施用剤の防除効果を検討した。

[成果の内容及び特徴]

- 1 無落水移植と落水移植において、移植時の殺菌剤の育苗箱施用は葉いもちの発生を同程度に低く抑えることができた（図1）。
- 2 以上のことから、無落水移植の条件でも葉いもちに対する育苗箱施用剤の防除効果は高く、落水移植と同程度であった。

[成果の活用上の留意点]

- 1 試験は、農業試験場内に無落水移植圃場と慣行の落水移植圃場を設置し、2021年～2024年に行った（図2）。品種は「ナツミノリ」を用い、栽植密度は70株/坪（株間16cm×条間30cm）で植付本数は3～4本/株とした。また、施肥量はN-6kg/10aで行った。
- 2 試験薬剤は、イミダクロプリド・スピノサド・イソチアニル粒剤（商品名：ルーチンアドスピノ箱粒剤）を用い、移植時に箱当たり50gを手散布した。また、薬剤施用後の苗にかん水せず移植した。
- 3 いずれの試験も接種条件で行い、葉いもちの発生状況は、2021年～2023年：少発生、2024年：中発生となった（図1）。

[具体的なデータ等]

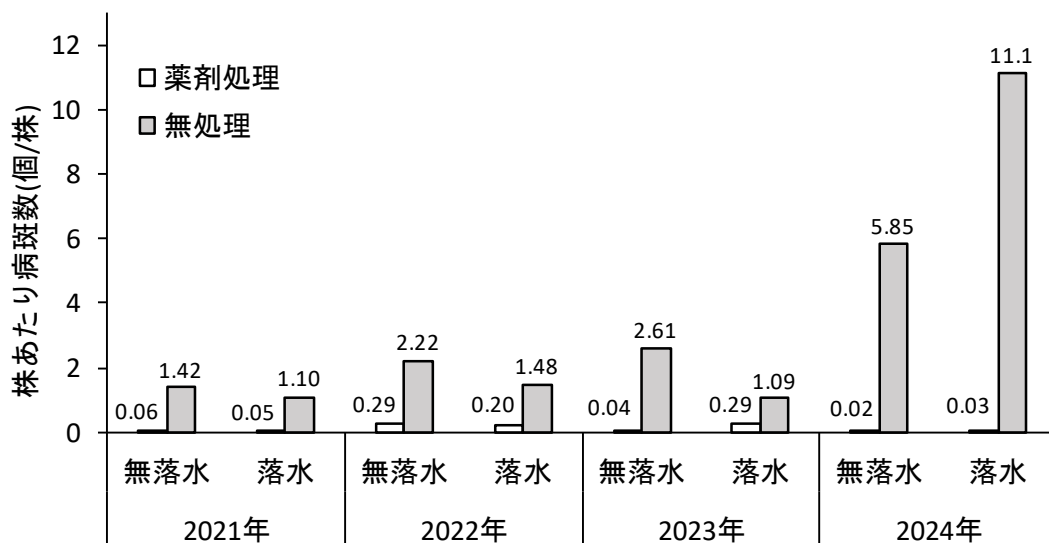


図1 各試験区における葉いもちの病斑数

- 1) 試験は2~3地点あたりの平均値を示す。
- 2) 図中の数値は上位3葉の株あたり病斑数を示す。

耕種概要

- ① 試験は移植時に湛水状態（水深約10cm）とした無落水移植圃場と、移植時に落水した慣行の落水移植圃場において、それぞれ薬剤処理区と無処理区を設置した。
- ② 移植日 2021年：5月13日、2022年：5月16日、2023年：5月15日、2024年：5月14日
 接種日 2021年：6月22日、2022年：6月22日、7月12日
 2023年：6月22日、7月3日、2024年：6月17日、6月23日
 調査日 2021年：7月30日、2022年：8月1日、2023年：7月25日、2024年：7月25日



図2 無落水移植の状況

注) 移植時に水深約10cmの湛水条件で移植した

[その他]

- 研究課題名：実需に応じた秋田米生産を支える病虫害防除技術の確立
 研究期間：令和3年度～令和6年度
 予算区分：県単
 掲載誌等：1 第77回北日本病虫害研究発表会 講演要旨（2024）
 2 第78回北日本病虫害研究発表会